

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

## 病害虫発生予察情報について（送付）

令和2年度（2020年度）発生予報第5号を下記のとおり発表しましたので送付します。

## 令和2年度（2020年度）病害虫発生予報第5号（8月予報）

## I 気象予報：令和2年（2020年）7月30日福岡管区气象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	20	30	50
	降水量	40	30	30
	日照時間	30	30	40

## II 【今後、注意すべき病害虫】

## 1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早植え 水稲	穂いもち	並	並	並(±)	並(±)	気温高(-) 降水少(-)	
	トビイロウンカ	多	並	多(+)	並~多(+)	気温高(+)	
普通期 水稲	葉いもち	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	気温高(-) 降水少(-)	
	トビイロウンカ	多	並	やや多(+)	並~多(+)	気温高(+)	
水稲 全般	コブノメイガ	多	やや多	多(+)	並~多(+)	気温高(+)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
チャ	炭疽病	やや多	多	やや多(+)	並(±)	気温高(+) 降水少(-)	
	カンザワハダニ	並	並	並(±)	並～少(-)	気温高(+) 降水少(+)	御船町 やや少(-)
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	やや少(-)	やや多～ やや少(±)	気温高(+)	合志市 少(-) 御船町 並(±)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～ やや少(±)	気温高(+)	御船町 やや多(+)
	チャノホソガ	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	合志市 並(±) 御船町 少(-) あさぎり町 やや少(-)
	チャノコカク モンハマキ	やや少	少	少(-)	並(±)	気温高(+)	合志市 多(+) 御船町 やや少(-) あさぎり町 並(±)
カンキツ	黒点病	やや多	並	並(±)	やや多～並 (+)	降水少(-)	宇城市 並(±)
	かいよう病	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	降水少(-)	宇城市 やや多(+)
	ミカンハダニ	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～並 (+)	気温高(+) 降水少(+)	宇城市 やや少(-)
果樹 全般	果樹 カメムシ類	多	多	—	カンキツ 多～並 ナシ 多～並 (+)	気温高(+) 降水少(+)	予察灯・フェロモン トラップ調査 合志市 多(+) 宇城市 多(+) 天草市 多(+)



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
夏秋 トマト	灰色かび病	やや多	並	少(-)	多(+)	気温高(+) 降水少(-)	
	葉かび病	やや多	並	やや多(+)	やや多~並(+)	気温高(+) 降水少(-)	
	すすかび病	並	やや多	少(-)	やや多~並(+)	気温高(+) 降水少(-)	
イチゴ 育苗ほ	炭疽病	やや少	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水少(-)	
	ハダニ類	多	多	多(+)	やや多~並(+)	気温高(+) 降水少(+)	
	アブラムシ類	並	やや多	多(+)	並(±)	気温高(+) 降水少(+)	
夏秋果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	やや多	やや多	トマト やや多(+)	キュウリ 並 トマト やや多~並(+)	気温高(+) 降水少(+)	
夏秋果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	並	並	-	ナス やや多~並(+)	気温高(+) 降水少(+)	
	アザミウマ類	並	並	-	ナス やや多~並(+)	気温高(+) 降水少(+)	
野菜類 全般	ハスモンヨトウ	やや多	やや多	トマト 並 イチゴ 並 (±)	トマト、ナス、イチゴ、露地キク 並(±)	気温高(+) 降水少(+)	フェロモントラップ 調査 合志市栄、阿蘇市一の宮、山都町鶴底、阿蘇市波野 多(+) 八代市鏡 並(±)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

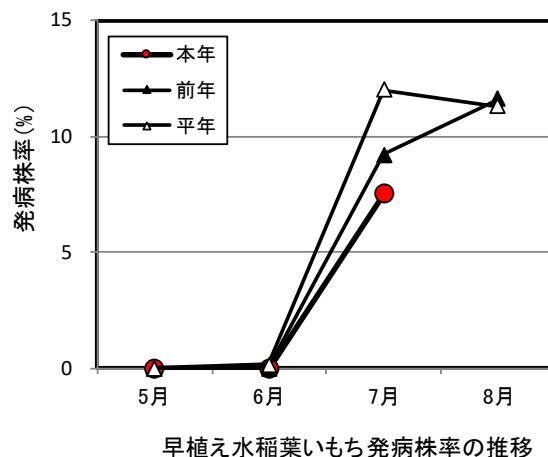


## 2 予想発生量、根拠、対策等

### ◎早植え水稻

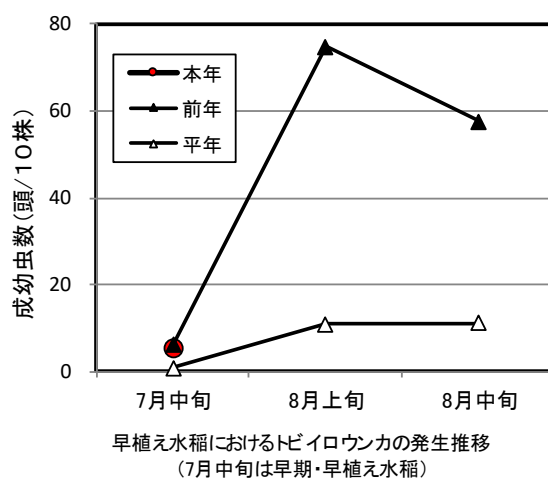
#### 1) 穂いもち

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、葉いもちの発病株率7.6%（平年12.0%）で平年並であった（±）。
- (3) 対策 ア ほ場を観察し、上位葉で葉いもちの発生がみられる場合は薬剤防除を行う。  
イ QoI剤は県内で耐性菌が発生しているため、移植時にQoI剤を使用したほ場では他系統の薬剤で防除する。



#### 2) トビイロウンカ

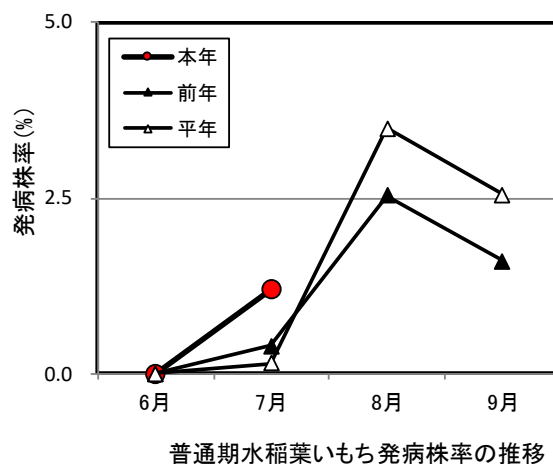
- (1) 発生量：多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、全ほ場（地点数15）で寄生が確認され、0.55頭/株（平年0.08頭/株、前年0.60頭/株）で、平年比多、前年並であった（+）。  
イ 6月中旬以降、断続的かつ多飛来しており、複数の飛来波が定着していると考えられる。
- (3) 対策 ア 若齢幼虫期が防除の適期になる。病害虫防除所が発表する防除適期情報を参考に適期防除に努める。  
イ 防除の詳細は、令和2年7月10日付け発生予察注意報第1号を参照する  
([http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200710\\_01tyui.pdf](http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200710_01tyui.pdf))。



### ◎普通期水稻

#### 1) 葉いもち

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率1.2%（平年0.1%）で平年比やや多であった（+）。
- (3) 対策 ア ほ場を観察し、上位葉で葉いもちの発生がみられる場合は薬剤防除を行う。  
イ QoI剤は県内で耐性菌が発生しているため、移植時にQoI剤を使用したほ場では他系統の薬剤で防除する。



## 2) トビイロウンカ

(1) 発生量：多

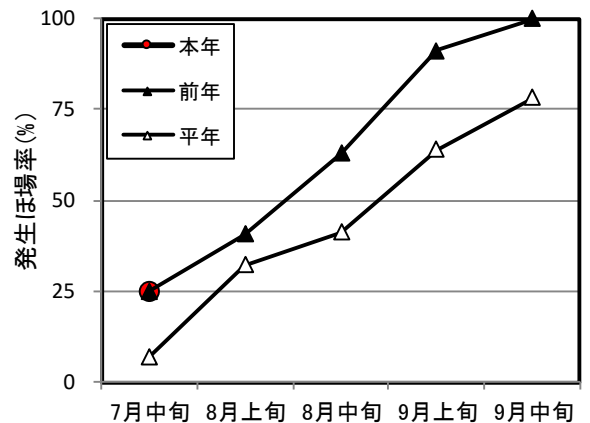
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.02頭/株(平年0.00頭/株、前年0.01頭/株)で平年比やや多で前年並、発生ほ場率は25.0%(平年7.0%、前年25.0%)で平年比多で前年並であった(+)

イ 今年度は効果の高い新規箱施薬剤を使用したほ場が増えているが、飛来量が非常に多く、7月の巡回調査では前年並の発生が見られる。

ウ 7月中旬の巡回調査でトビイロウンカの成虫、若齢幼虫を確認したことから、7月上旬と中旬に飛来した個体が定着していると考えられる。

(3) 対策 ア 若齢幼虫期が防除の適期になる。病害虫防除所が発表する防除適期情報を参考に適期防除に努める。

イ 防除の詳細は、令和2年7月27日付け発生予察技術情報第7号を参照する([http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200727gi\\_jyutu.pdf](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200727gi_jyutu.pdf))。



普通期水稲におけるトビイロウンカ発生ほ場率の推移  
中旬※9月中旬の平年値は多発年を除く8か年の平均

## ◎水稲全般

### 1) コブノメイガ

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、早植え水稲で発生ほ場率73.3%(平年22.2%)、株あたり巻葉数2.14葉(平年0.11葉)で平年比多、普通期水稲で発生ほ場率30.0%(平年1.1%)、株あたり巻葉数0.12葉(平年0.01葉)で平年比多であった(+)

イ 6月中旬以降、断続的かつ多飛来しており、複数の飛来波が定着していると考えられる。

(3) 対策 ア 水田における発生状況を確認し、要防除水準(第1世代幼虫による被害株率が20%以上)を超える場合は防除を行う。

イ 防除適期は粒剤が発蛾最盛期(成虫羽化期)、粉剤・液剤は若齢幼虫期(発蛾最盛期から1週間後)である。病害虫防除所が発表する防除適期情報を参考に適期防除に努める。

ウ 防除の詳細は、令和2年7月10日付け発生予察注意報第2号

([http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200710\\_02tyui.pdf](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200710_02tyui.pdf))及び令和2年7月27日付け発生予察技術情報第7号

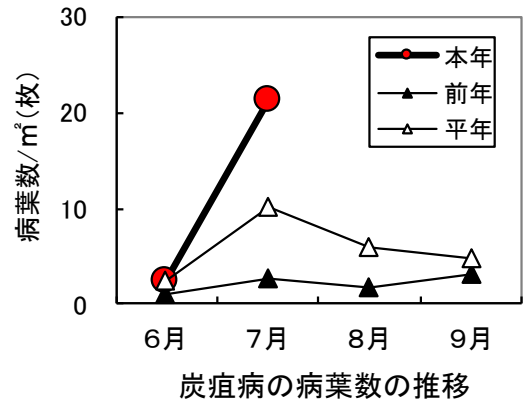
([http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200727gi\\_jyutu.pdf](http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/200727gi_jyutu.pdf))を参照する。



◎チャ

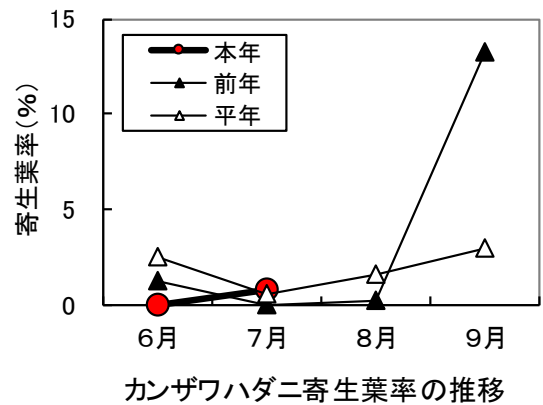
1) 炭疽病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、病葉数21.3枚/m<sup>2</sup> (平年10.2枚/m<sup>2</sup>) で平年比やや多の発生であった(+).
- (3) 対策 ア 新芽の開葉期に1～2回防除を行う。  
イ 常発地では摘採葉を園外に持ち出し、残葉からの感染にも注意する。



2) カンザワハダニ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率0.8% (平年寄生葉率0.5%) 平年並の発生であった(±)。  
イ 茶業研究所 (御船町)の7月1～4半旬の調査では、平均寄生葉率0.3%(平年1.3%)で平年比やや少の発生であった(-)。
- (3) 対策 ア 8月下旬に一時的に発生がみられることもあるので、ほ場での発生状況を確認し、密度が高い場合は収穫前使用日数を遵守して防除する。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。  
イ 三番茶摘採園で発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。  
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、二番茶摘採前に使用した薬剤と系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



### 3) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 0.5% (平年1.9%) で平年比やや少の発生であった(－)。

イ 茶業研究所 (御船町) のたたき落とし調査では、7月1～4半旬の捕獲頭数は137頭 (平年149頭) で平年並の発生であった(±)。

ウ 生産環境研究所 (合志市) の粘着トラップ調査では、7月1～4半旬の捕獲頭数は27頭 (平年116頭) と平年比少の発生であった(－)。

(3) 対策 ア 新芽が加害されるので、開葉期に防除する。

イ 有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期となる羽化最盛期は、下表のとおりである (最新の情報は病害虫防除所のホームページを参照)。

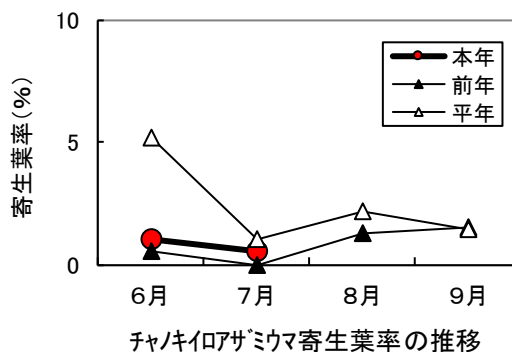


表 チャノキイロアザミウマの羽化最盛期予測 (7月31日現在)

アメダス地点	鹿北	菊池	甲佐	水俣	上
第5世代	8月15日	8月7日	8月5日	8月5日	8月12日
第6世代	9月3日	8月24日	8月23日	8月22日	8月30日

### 4) チャノミドリヒメヨコバイ

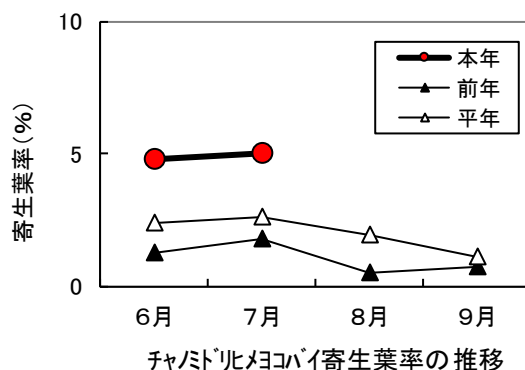
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 5.0% (平年2.6%) と平年比やや多の発生であった(+).

イ 茶業研究所 (御船町) のたたき落とし調査では、7月1～4半旬の捕獲頭数は77頭 (平年15頭) と平年比やや多の発生であった(+).

(3) 対策 ア 新芽が加害されるので、開葉期と2～3葉期に防除する。

イ 発生時期が重なるチャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。



### 5) チャノホソガ

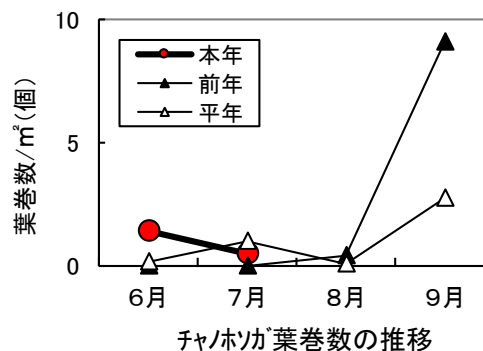
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、1㎡当たり葉巻数は0.5枚 (平年の1㎡当たり葉巻数1.0枚) と平年並の発生であった(±)。

イ フェロモントラップ調査では、生産研 (合志市) は平年並(±)、茶研 (御船町) は平年比少(－)、球磨農研 (あさぎり町) は平年比やや少(－)であった。

(3) 対策 ア 新葉が加害されるので、開葉期と2～3葉期に防除する。

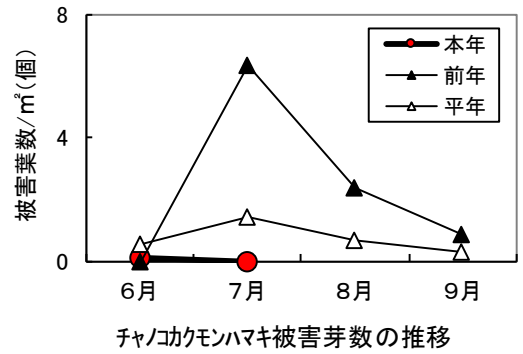
イ 発生時期が重なるチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。





6) チャノコカクモンハマキ

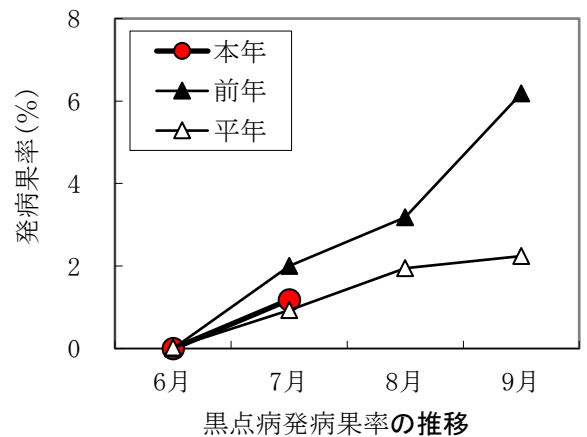
- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠
  - ア 7月の巡回調査では、発生は認められず（平年の1㎡当たり被害葉数1.4枚）平年比少であった（-）。
  - イ フェロモントラップ調査では、生産研（合志市）は平年比多（+）、茶研（御船町）は平年比やや少（-）、球磨農研（あさぎり町）は平年並（±）であった。
- (3) 対策
  - ア 葉巻後の防除効果は劣るため、発蛾最盛期の7日～10日後に若齢幼虫を対象に薬剤防除を行う。



◎カンキツ

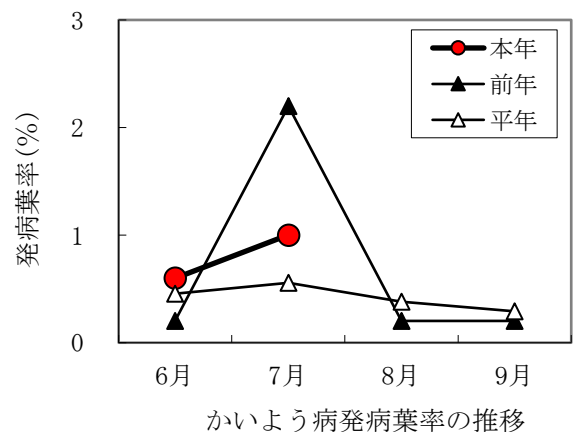
1) 黒点病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠
  - ア 7月の巡回調査では、発病果率1.2%（平年0.9%）で平年並の発生であった（±）。
  - イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、7月第5半旬の発病果率は100.0%（平年94.8%）、発病度26.3（平年35.9）と平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策
  - ア 保菌率が高い直径5～10mmの枯枝を剪除する。
  - イ 剪定枝は、伝染源になるので園外に持ち出し処分する。
  - ウ 前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期に防除を行う。降雨が少ない場合は、前回の散布から30日経過したら必ず防除を行う。



2) かいよう病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠
  - ア 7月の巡回調査では、発病葉率1.0%（平年0.6%）、発病果率1.0%（平年0.0%）で、平年比やや多の発生であった（+）。
  - イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、7月第5半旬の発病葉率は7.2%（平年1.6%）で、平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策
  - ア 伝染源となる発病葉や枝、果実は除去する。
  - イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除および剪除を行う。
  - ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。





### 3) ミカンハダニ

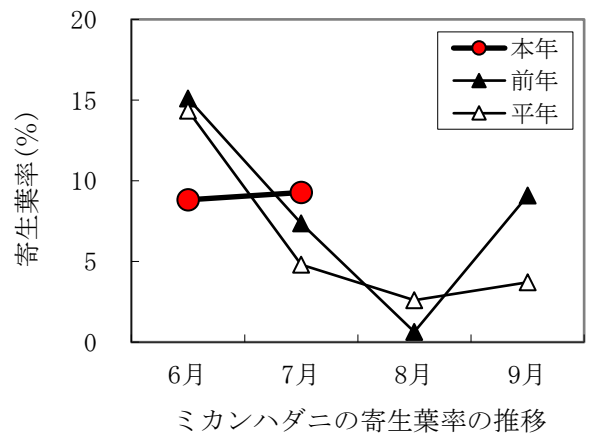
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、一部のほ場で多発生がみられ、雌成虫の寄生葉率9.3%（平年4.8%）、寄生頭数3.1頭/10葉（平年1.7頭/10葉）と平年比やや多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場では、7月第5半旬の雌成虫の寄生葉率は1.0%（平年4.8%）、寄生頭数0.1頭/10葉（平年1.4頭/10葉）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 巡回調査では一部で要防除水準を超えた園も見られたので、定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達した場合は防除する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。



### ◎果樹全般

#### 1) カメムシ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 予察灯及びフェロモントラップの7月第1～5半旬の誘殺数は、表1のとおり合志市、宇城市（松橋）および天草市（本渡）で平年比多であった（+）。

イ ヒノキ球果の1果当たりの口針鞘数が25本に達する時期が、新世代成虫がヒノキ球果から離脱し、樹園地へ飛来する時期の目安となる。7月下旬におけるヒノキ球果の1果当たり口針鞘数は、表2のとおり県内6地点の平均が1.0本で平年比少であった（-）。

ウ ヒノキ球果に寄生する成幼虫数は1.5頭/5枝（平年3.8頭/5枝）と平年比やや少であった（-）。

(3) 対策 ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ 最新のカメムシ類の誘殺状況は、病害虫防除所ホームページに掲載しているので、確認し防除の参考にする。

ウ 7月下旬におけるヒノキ球果の口針鞘数から予測した樹園地への新世代成虫の飛来予測時期は表2のとおりである。



表1 各地域のカメムシ類の誘殺状況（7月1半旬～7月5半旬）

地域名	チャバネアオカメムシ						ツヤアオカメムシ					
	予察灯			フェロモントラップ			予察灯			フェロモントラップ		
	本年	平 年 値	平 年 比 (%)	本年	平 年 値	平 年 比 (%)	本年	平 年 値	平 年 比 (%)	本年	平 年 値	平 年 比 (%)
合志市	312	79	395	2,007	134	1,498	114	36	317	6	0	0
宇城市 (松橋町)	3,181	215	1,480	14,668	651	2,253	743	253	441	59	5	1,180
天草市 (本渡町)	73,295	2,508	2,922	16,086	2,584	623	1,870	602	311	233	38	613

単位：頭、 平年比（%）：（本年誘殺数／平年値）×100

表2 7月下旬におけるヒノキ球果の1果当たり口針鞘数および新世代成虫の飛来予測時期

地点	口針鞘数 (本) X	離脱までの日 数 Y	調査日	予測式で算出 された離脱予 想日	新世代成虫の 飛来予測時期
合志市 栄	0.1	54	7月22日	9月13日	9月中旬以降
熊本市河内町	0.0	54	7月21日	9月13日	9月中旬以降
宇城市松橋町	1.5	49	7月21日	9月7日	9月上旬
宇城市三角町	3.3	42	7月21日	8月31日	8月下旬
天草市有明町	0.7	51	7月22日	9月11日	9月中旬
天草市本渡町	0.4	53	7月22日	9月12日	9月中旬
平均	1.0	50	-	9月9日	9月上旬
昨年	2.8	53	-	-	-
平年	3.9	45	-	-	-

- ・ 1地点30球果を調査。
- ・ 離脱予想日は、福岡県農業総合試験場が開発した予測式により算出した。  
 予測式： $Y = 54.17 - 3.776X + 0.01937X^2$   
 （Y：調査日から離脱日までの日数、X：7月下旬におけるヒノキ球果1果当たりの口針鞘数）
- ・ 予測式による計算値がマイナスになった場合は離脱日までの日数を0とした。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

◎夏秋トマト

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率が茎葉4.0%（平年茎葉11.9%）で、平年比少の発生であった（－）。

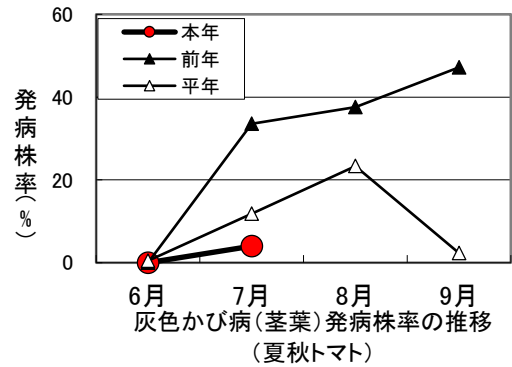
イ 阿蘇市及び山都町の防除員からは平年比多の報告であった（＋）。

(3) 対策 ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。

イ 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

ウ 9月の秋雨の時期に発生が多くなる傾向にあるため、発生が見られたほ場では8月の防除を徹底する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) 葉かび病

(1) 発生量：やや多

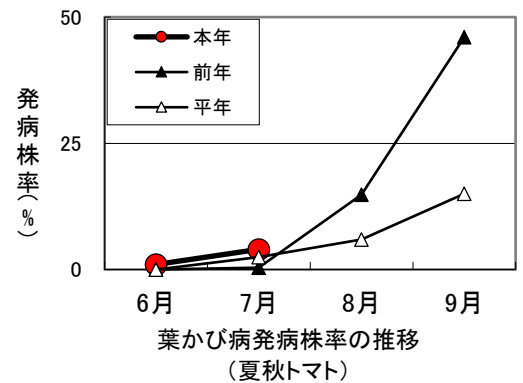
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率4.0%（平年2.5%）で、平年比やや多の発生であった（＋）。

(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



3) すすかび病

(1) 発生量：並

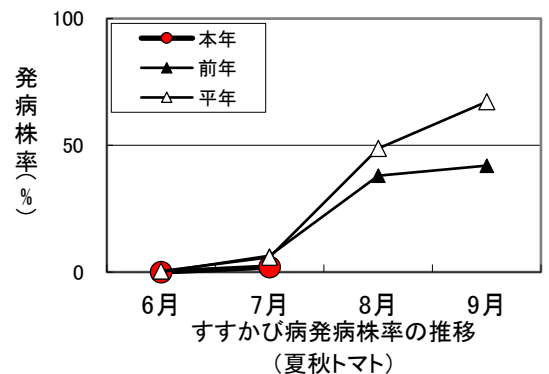
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率2.0%（平年5.9%）で、平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

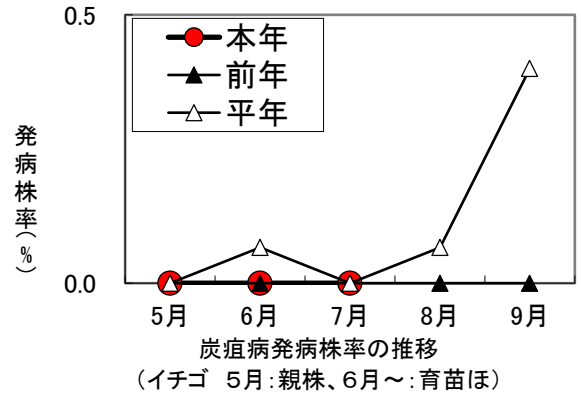
エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



◎イチゴ育苗ほ

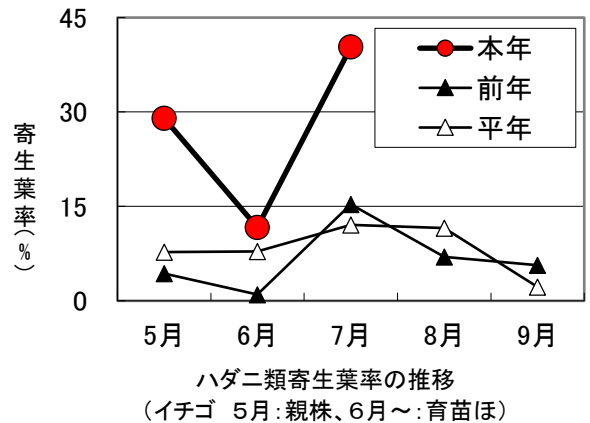
1) 炭疽病

- (1) 発生量：やや少
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発生がみられず（平年0.0%）、平年並であった（±）。
- (3) 対策 ア 親株床、育苗床はビニールで雨よけをする（3防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。  
イ 頭上かん水を避け、株元に手かん水する。  
ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。  
エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。  
オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後および摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。



2) ハダニ類

- (1) 発生量：多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率40.3%（平年12.1%）で平年比多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 本ほに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する（3防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。  
イ 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。  
ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期から防除を徹底する。  
エ 葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏にも十分かかるように散布する。  
オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ほでの栽培期間を通じた防除計画を立て、育苗期は気門封鎖剤を主体とした防除を行う。



### 3) アブラムシ類

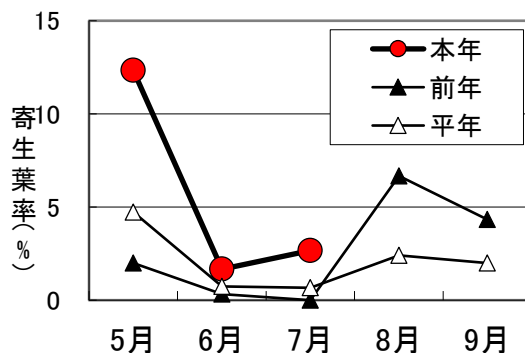
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率2.7% (平年0.7%) で平年比多の発生であった (+)。

(3) 対策 ア 本虫の寄生した株をハウス内に持ち込まない。

イ 発生源になる周辺雑草の除去を行う。

ウ ワタアブラムシについては薬剤感受性の低下した個体群も見られるので、薬剤防除にあたっては、同一系統薬剤の連用を避ける。



アブラムシ類寄生葉率の推移  
(イチゴ 5月:親株、6月~:育苗ほ)

### ◎夏秋果菜類 (高冷地)

#### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

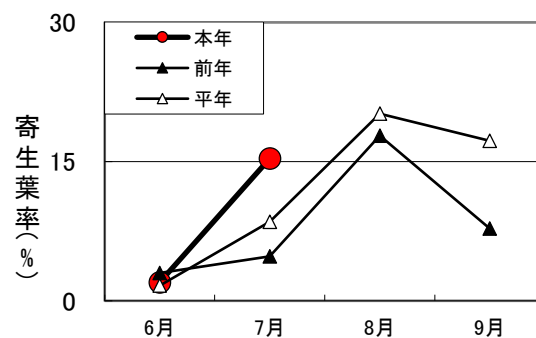
(2) 根拠 ア 夏秋トマト7月の巡回調査では、寄生葉率15.3% (平年8.5%) で、平年比やや多の発生であった (+)。

(3) 対策 ア 幼虫や成虫などの発育ステージによって有効薬剤が異なる。複数の発育ステージの個体が混在すると防除が困難となるので、初期防除を徹底する

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類寄生葉率の推移  
(夏秋トマト)

### ◎夏秋果菜類 (平坦地)

#### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア ナスにおいて熊本市植木町の防除員からは平年比やや多、和水町の防除員からは平年並の報告であった (+)。

(3) 対策 ア 密度が高くなると各発育ステージが混在し防除が困難となるため、低密度での防除を徹底する。

イ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



## 2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア ナスにおいて熊本市植木町の防除員からは平年比やや多、和水町の防除員からは平年並の報告であった(+)。

(3) 対策 ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類およびトマトでは本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策」を参照)。

ウ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

## ◎野菜類全般

### 1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、トマト、イチゴで発生を認めず(平年寄生株率トマト0.0%、イチゴ0.1%)、平年並であった(±)。

イ フェロモントラップによる6月第5半旬~7月第4半旬の誘殺数は、合志市栄が1,005頭(平年514頭)、阿蘇市一の宮が2,756頭(平年748頭)で平年比多であった(+)

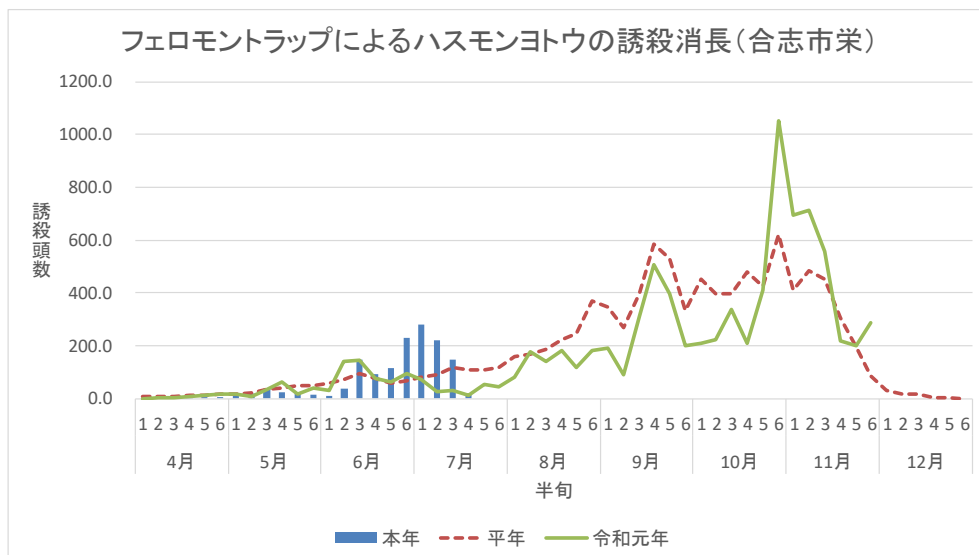
(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

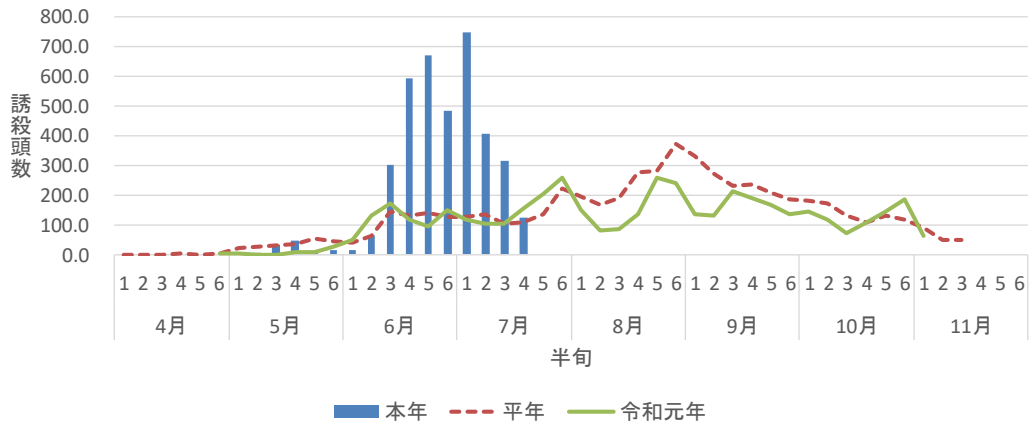
オ 最新のフェロモントラップによる誘殺状況を熊本県病害虫防除所ホームページに掲載しているので確認し、防除の参考にする。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

### フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺消長 (阿蘇市一の宮)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>



### 3 防除のポイント等

#### カンキツのカイガラムシ類の防除対策について

近年、アカマルカイガラムシとナシマルカイガラムシの発生が増加しています。これらのカイガラムシ類は枝に重なるように寄生し、虫体が被覆物質に覆われているため、薬剤がかかりにくく、発生が多くなってからでは防除が困難です。盛夏期以降に急速に増加する傾向にあり、向こう1か月の気温は平年に比べ高い予想から、カイガラムシ類の発生量が多くなることが懸念されます。以下の防除適期を参考にし、高い防除効果が期待できる幼虫発生初期の薬剤防除を実施しましょう。

##### <防除適期>

- ・アカマルカイガラムシは7月下旬～8月上旬頃。
- ・ナシマルカイガラムシは7月下旬～8月中旬頃。

#### 台風接近時の虫媒伝染性ウイルス病まん延防止対策について

近年、トマトやウリ科野菜における抑制栽培及び促成栽培での虫媒伝染性ウイルス病の多発要因の一つとして、育苗期や定植初期の台風接近に伴って、ビニル被覆を除去したり、定植前の苗を移動させた際に、保毒虫が侵入し、生育初期に感染してしまうことが考えられる。

これからの時期は、トマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、台風シーズンも本格化するため、台風接近時には以下の対策を行い、生育初期のウイルス感染を防止しましょう。

##### I. 事前対策

- ①被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無いか点検し、必要に応じて補修する。
- ②ハウス内の感染株は伝染源となるので、抜き取り適正に処理するか茎を切断する等して枯らしておく。
- ③台風の進路等によっては、ビニルを除去する可能性があるためコナジラミ類・アザミウマ類の飛散予防策として、防除を徹底し生息密度を下げる。
- ④台風の被害が大きいことが予想される場合、鉢上げ前の播種箱やセルトレイの苗は納屋等に移動する。
- ⑤育苗ハウスから苗を運ぶ際には、移動中にコナジラミ類・アザミウマ類が寄生しないよう、運搬車等の荷台を防虫ネットやほろ等で覆う。

##### II. 事後対策

- ①ビニル・防虫ネットを除去した場合、早急に再度展張する。
- ②移動しておいた苗は育苗ハウス内に運び込む。
- ③寒冷紗等の被覆を行った苗は、早急に被覆を除去する。

上記の作業が終了したら、薬剤散布を行いコナジラミ類・アザミウマ類の防除を行う。



## 野菜のウイルス病対策 「入れない」対策を徹底しましょう

本県では「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「スイカ退緑えそ病」、「トマト黄化えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらウイルス病対策としては、ウイルス感染植物を除去することと保毒虫を防除することが基本となります。しかし、薬剤処理による媒介微小害虫の防除だけではウイルス病を完全に抑えることは不可能であるため、耕種的防除や物理的防除を組み合わせた総合的な防除対策を講じる必要があります。

特に、これからの時期はトマトやウリ科野菜で抑制栽培等の定植が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、施設内への飛び込みが更に多くなるため、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期となります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

### I. 保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早ければ早い程、経済的被害は大きいので、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

#### □育苗期

- ①育苗ハウスは、本ぼと別に設け、ハウスの開口部(サイド、換気部など)には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- ②雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、育苗開始10日前までにハウス内・周囲から除去する。
- ③ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- ④発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- ⑤定植2～3日前に、育苗期後半に登録のある薬剤を処理する。

#### □本ぼ定植以降

- ①サイド開口部は目合い0.4mm(アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下)防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- ②ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- ③育苗ハウスから本ぼへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- ④育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

# イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

## I. 炭疽病

保菌株からのまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- ① 苗床は必ず雨よけを行う(寒冷紗は雨よけにならない)。
- ② 育苗ほは、冠水しないように排水対策を講じる。
- ③ 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
- ④ 定期的に予防防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- ⑤ 発病株は速やかにほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
- ⑥ 苗不足により、緊急的に苗を確保する場合は、発生していないほ場から確保する。

## II. ハダニ類

本ほに持ち込まないよう、育苗期の防除を徹底しましょう。

<防除対策>

- ① 育苗ほ周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。
- ② 下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。
- ③ 除去した下葉は、ほ場外に持ち出し、速やかに処分する。
- ④ 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分に確保し、丁寧に散布する。
- ⑤ 育苗ほでの発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。  
ただし、気門封鎖剤は、直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。  
また、残効も短いので、5～7日の間隔で複数回散布する。
- ⑥ 同一系統薬剤の連用を避け、育苗から本ほでの栽培期間を通し計画的に使用する。

## III 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
早植え 水稻	斑点米カメムシ 類	並	巡回調査は平年並(±)。
	紋枯病	やや多	巡回調査は、平年比やや多(+) 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤防除を行う。 (要防除水準：穂ばらみ期の発病株率20%)
普通期 水稻	紋枯病	並	巡回調査は、平年並(±)。 穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤防除を行う。 (要防除水準：穂ばらみ期の発病株率20%)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	並	巡回調査は平年比やや多(+) 防除員報告は平年並～やや少(-) 黄色粘着トラップ調査は平年比やや少(-) 果実(100果)を薄めた展着液または洗剤で洗い、捕獲された虫数が10頭を超えた場合は防除を行う。
ナシ	うどんこ病	並	巡回調査は平年並(±) 晴天・乾燥が続くと多発する。 早期落葉により樹勢が低下するので予防防除を徹底する。
	ハダニ類	並	巡回調査は平年並(±) 防除員報告は平年並(±) 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率20%以上、1葉当たり1～2頭に達したら防除する。
夏秋ナス (平坦地)	灰色かび病	並	防除員報告は、平年比多から並(+) 発生が見られたほ場では8月の防除を徹底する。
	すすかび病	並	防除員報告は、平年並(±) 葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
イチゴ 育苗ほ	うどんこ病	少	巡回調査は、平年比少(-) 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	並	防除員報告は、平年比やや多(+) 適正な肥培管理を行う。
	うどんこ病	並	防除員報告は、平年並(±) 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
夏秋 キャベツ	細菌性病害 (黒腐病、黒斑 細菌病、軟腐 病)	並	防除員報告は、平年並(±) 発生後の防除は困難なため、激しい風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行う。
露地キク	黒斑病	やや多	防除員報告は、平年比やや多(+) 罹病葉が伝染源となって感染が拡大するので、罹病葉は早めに除去し、適切に処分する。
<p><b>【野菜病害虫の共通対策事項】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。</li> <li>・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。</li> <li>・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。</li> </ul>			



#### IV その他

### 農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(生産環境研究所病害虫研究室)  
(TEL：096-248-6490)にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」